福祉会会報

社会福祉法人
大分県福祉会
大分市顕徳町
１－１３－１７
発行者
有松一郎
☎532－3472

法人創立七十周年記念講演会

令和四年十二月十七日(土)に全労研ソレイユにて社会福祉法人大分県福祉会七十周年記念講演会が開催された。新型コロナウイルス感染症の影響で二年行われていなかった夏期研修会が、七十周年記念事業としてプロジェクト委員会より立案され、今回の講演会が開催された。

久しぶりの集合型の行事となり、法人職員同士が近況を話すことのできる貴重な時間となった。会の前後では新型コロナウイルス感染症の状況や近況報告などが話され、笑顔が多く見られていた。

理事長のあいさつでは、日頃の業務に対する労いの言葉と、将来を見据えてどんな法人になって欲しいか、どんな法人にしていきたいかを考えながら、職員全体でチームワークを取りながら特に若い世代の職員に頑張って欲しいと激励の言葉があった。

また、長きにわたり理事、監事を務められた佐藤光一郎氏、川野義人氏、秀嶋良昭氏の三名に永年勤続感謝状、二十年から二十二年間の勤続職員六名に永年勤続表彰状が渡された。勤続二十二年の明野しいのみ保育園原口直美さんから長年勤続できたことの謝辞と今後も法人の一員として勤務に励むとの決意が表された。

記念講演会では、奈良県にあるたんぽぽの家常務理事の岡部太郎氏より「福祉現場の広げ方　福祉法人のブランディングについて」という演題で講演をしていただいた。講演では岡部氏のこれまでの二十年間の活動を聴いた。障がいがある人とない人のコミュニケーションの方法にアートを用いて進めてきた活動や福祉の知識がない人との融合など興味深い話が数多くあった。中でもたんぽぽ憲法を掲げ、みんなで同じ方向を向いて取り組んでいるという話が印象的だった。

また、現在法人のブランディングを担当していただいている大阪府のUMA/design farm原田祐馬氏とのトークセッションもzoomにて行われた。様々な事業を共にしている二人のやり取りは軽快で興味が持てるものだった。たんぽぽの家の創立にも関わっていた原田氏も当時の様子を思い出しながらの話で、色々な方向に課題があるが、ヒントもあり、それをそれぞれ現場の職員がどれだけ見つけるのか、同じ視点に立ったり、様々な視点に立ったりできるかなど、お二人の話を聞く中で、私たちの法人に対する今後の課題や展望が見えたように思う。職員からの質問も活発に行われ、学びの多い良い講演会になった。

次回担当園のクローバー関谷眞佐子園長より現在の社会状況にしっかり向き合い、また来年お会いしましょうという言葉で閉会した。

表彰

令和四年十一月十一日(金)第七十五回全国児童養護施設長研究協議会大分大会が大分市のホルトホールで開催された。式の中で森の木の竪山康代職業指導員が児童養護事業功労者に対する厚生労働大臣表彰を受賞した。竪山指導員は森の木で退園生のアフターケアや退所前の児童に対してもリービングケアを行うなど施設と社会を結ぶ大切な割りを担っている。受賞、おめでとうございます。

年頭所感

次代への備え、新しい福祉への挑戦

社会福祉法人　大分県福祉会
理事長　有松　一郎

新年明けましておめでとうございます。皆様には、令和五年の新春を健やかに迎えられたこととお慶び申し上げます。

振り返りますと昨年は、三年目を迎えたコロナ禍による社会活動の停滞に加え、ロシアによるウクライナ侵攻に起因する世界的な燃料や食料不足、さらにはその影響としての世界的インフレの進行と物価高騰と、福祉を取り巻く環境は一段と厳しさを増す一年でありました。一方で年の後半では、本格的な「withコロナ」の時代へと変化し始め、様々なイベント等が通常通り開催されるようになったり、コロナ禍前と同様に国内外の観光を楽しむことが出来るようになったりし、まさにニューノーマルの時代の入り口を迎えた年でもあったと思います。当法人につきましては、創立七十周年の記念の行事として各施設で開催された七十周年記念のオープン施設や見学会、さらには滝尾保育園で開催された七十周年記念青空マルシェには利用者ご家族はもとより、近隣の方々など五百名を超える皆様にご来場いただき大盛況のうちに終えることが出来ました。また十二月には、七十周年の記念式典と記念講演会をリアルとリモートを活用したハイブリット形式で開催することも出来、今後八十周年さらには百周年と続く道に、確実な一歩を刻むことが出来たと感じております。これもご利用児者とご家族の皆様の絶大なご理解とご協力、さらには関係御当局のご指導・ご鞭撻、そしてなにより役職員一同の使命感溢れる日々のご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。

また昨年は、当法人が掲げています中期ビジョンの実現への取り組みにつきましてもしっかりとした歩みを刻むことが出来ました。働き方改革への取り組みとして、組織内コミュニケーションの更なる充実を目的として、「line works」(ライン　ワークス)を導入し、業務で活用すると同時に新しいコミュニケーションを通じた業務の効率化や組織運営の改善へのチャレンジを始めました。一昨年より引き続き外部クリエイターとのコラボレーションによる、ブランディングや新しい福祉への挑戦も、未来への希望につながる成果を出しつつあります。さらには法人内サーバーのクラウド化等、次代への備えにも取り組むことが出来たと感じております。

最後に、本年の干支は「癸卯(みずのと・う)」です。「癸(みずのと)」は、次の新たな生命が成長し始めていることを表し、「卯(う)」は兎の様に跳ね上がる様を表すことから、本年は「これまでの努力が実を結び勢い良く成長し飛躍する年」といった縁起の良い年と言われています。本会としても、現在の困難な環境を克服し、これまで取り組んできたデザイン経営への挑戦や働き方改革、ＤＸへの取り組み等を目に見える成果へと昇華させ、大いなる飛躍の年にしたいと考えております。利用児者の皆様や勤務いただく役職員はもとより、本会に期待と信頼をお寄せいただくすべての皆様に、本年もさらなる進化を目指し続けることをお約束し、今後益々の皆様のご支援・ご協力をたまわりますことを心よりお願い申し上げ、新年のご挨拶といたします。

理事会報告

九月定時理事会
(令和四・九・二十一)

①規則改正(就業規則、給与規則、育児休業業等に関する規則及び介護休業等に関する規則、ハラスメント防止規則)②地域小規模児童養護施設の開設について③森の木法人車購入について④積立資産の取崩について⑤令和四年度第一次補正予算について審議を行い、いずれも原案どおり承認された。

十二月定時理事会
(令和四・十二・十四)

①規則改正(うえの園運営規定)②積立資産の取崩について③令和四年度第二次補正予算について④森の木の定員について審議を行い、いずれも原案どおり承認された。

報告事項では、大分市指導監査結果(滝尾保育園、明野しいのみ保育園)、令和四年度第一回福祉サービス運営委員会、令和五年度新採用試験結果、「日本財団みらいの福祉施設建築プロジェクト」について報告を行った。

福祉サービス運営委員会報告

令和四年度第一回福祉サービス運営委員会が、令和四年一一月一五日(火)本部会議室において開催された。

改選された委員に委嘱状の交付を行い、理事長挨拶の後、委員長に仲元研二氏を選出した。四年度前期の本部及び各施設の重点的取り組みの状況や利用者等からの苦情、要望、事故報告、ヒヤリハットが報告されその対応について協議が行われた。

本部から、中期事業計画を着実に進めるため、七項目の重点的取り組みを掲げニーズや時代の変化に対応できる業務・サービスの再構築を図っていることや、法人創立七十周年を迎え、将来の法人発展につながる礎となる記念事業を展開していることが報告された。

施設からは、ウィズコロナの対応をしながら事業を進めていることが報告された。

利用者家族委員から、家族の施設入所で利用者支援の在り方が参考になる、些細な課題にも迅速に対応していただいている、送迎時の車の走行について怖さを感じることがある、コロナ禍で親同士の情報交換が希薄な状況である、親と職員との情報交換の場がほしい。第三者委員から、同年齢のこども間のトラブルにユニット職員にはきめ細かい対応をお願いしている等のご意見を頂いた。

目標に対して施策の取組ができている、職員が心を一つにしてモチベーションを高め目標に取組むための理念を掲げ努力することでサービスの充実が図れる、パワハラ問題の根底に行っている人もプレッシャーを抱えている場合が多く組織的な問題があるので職員のモチベーションを高めることを考える、利用者をお預かりしてサービスを提供する事業所ではリスクアセスメントを行い改善が必要との総評があった。

福祉現場が働きやすく楽しくやりがいがある場所であることを伝えていきたい、七十周年を契機に現場の発想を経営に反映しトライアンドエラーでよい方向を目指していきたいとの理事長のあいさつで会を閉じた。

別府厚生館
令和四年を労う忘年会

毎年十二月に、その年の慰労や利用児者の方と職員の親睦を兼ねて忘年会を行っている。新型コロナウイルス感染症第八波が迫る中ではあったが、感染対策を行い、今年度も十二月三日(土)に別府市内のシーサイドホテル美松大江亭にて開催。和やかな雰囲気の中、利用児者や職員皆で豪華な夕食を囲んだ。

食事会ではそれぞれのテーブルで各家庭仲睦まじい光景がひろがり、お子様プレートの子どもたちは手巻き寿司をはじめとした豪華な料理に大喜び。小学生以上の子どもたちや母親は大分県産の新鮮な食材をふんだんに使用した懐石料理に舌鼓を打ち、「おいしいねえ」「この料理の具材は何だろうね」と談笑しながら食事を楽しんだ。

食事がひと段落し、恒例のくじ引き大会とビンゴ大会を開催。幼児、小学生、中高生別にくじ引きを行う途中、子どもたち同士で作戦を立てたり、くじを譲ったりしあう微笑ましい姿がみられた。ドキドキしながら引き当てたプレゼントを早速開けた子どもからは大きな歓声が聞こえた。続いて、母親が楽しみにしているビンゴ大会。ビンゴの目が揃った方から希望の景品を選ぶ中、子どもたちが母親を応援して周りを囲んだり、一緒に喜んだりと賑やかな光景が会場中に広がった。

その日はそのままホテルに宿泊し、別府湾を目の前に望む部屋からのゆったりとした時間や、温泉を楽しんでいただいた。日常から離れたひと時を過ごした利用児者の皆さんは、翌日帰館の際には「楽しかった」「温泉でリフレッシュできた」「お布団がふかふかで気持ちがよかった」と喜びの声を職員にかけてくれた。中には「興奮して一晩中眠れなかった」と笑顔で話す方もおり、各家庭で年末の良い思い出づくりができた。

今後も利用児者の方が充実した日々を送っていただけるような行事を企画したい。

福祉ハウスクローバー
九電工　愛のもちつき
～コロナに負けるな　餅つきの掛け声高く～

十二月三日（土）の寒空の中、第四十三回九電工愛の餅つきが開催された。

昨年度はコロナ禍のためパフォーマンスとしての一臼のみの餅つきだったが、今年度は『コロナと共に…』という視点と、九電工の方との交流を大切にしたいという思いで、昨年度から量を増やし、二臼の餅つきを行った。

うえの園・清明あけぼの学園に分かれ、それぞれ一臼分ついた。利用児者は我先にと臼の周りに集まり、列をなしていた。職員と一緒に杵を持ち、「ペッタン、ペッタン」という掛け声の中、餅つきを行った。「ひとりでやりたい！」と言い、自分で杵を持ってつく子どもや職員よりも餅つきに慣れている利用者さんもいて、「上手ー！」という歓声が起きていた。つき上がった餅はその場で、きな粉餅にして食べた。距離をとりながらではあるが数年ぶりに皆で一緒に食べることができ、参加者全員に笑顔があふれた。

今年は餅つきと同時に九電工の方が、ポップコーンを作ってくださり、餅と併せて味わうことができた。中には会場に広がる良い香りに惹かれ、「餅よりポップコーン！」という声や、ポップコーンがはじける様子をじっと見守る様子もあった。

餅つきの後には、サプライズでサンタクロースが登場！利用児者の皆にクリスマスプレゼントとジュースをいただいた。思わず「センキュー！」とお礼を言う子どももいた。

また、昼食時には、あんこ餅も食べることができ、皆、満足気だった。

コロナ禍以前より規模は小さかったが、昨年に比べると交流を楽しむことができ、有意義な時間を過ごすことができた。新型コロナウイルス感染症で制限されることもまだまだ多いが、今だからこそできることを見つけ、楽しい時間を過ごしたいと改めて感じた行事だった。

森の木
待ちに待ったユニット旅行

令和四年十月～十二月にかけて三年越しのユニット旅行が実現した。行き先は、大分・熊本・宮崎で旅行会社にプランを立ててもらった。その旅行プランを見ながら、子どもたちが行き先を決めた。旅行会社や職員が行き先の資料を渡すと、旅行のイメージが膨らみ、出発までの間子どもたちはとても楽しみにしていた。当初は夏に計画をしていたが、新型コロナウイルス感染症が広がり実施出来なかった。夏休みの一大イベントを楽しみにしていた子どもたちは落ち込んでいたが、「中止」ではなく「延期」になったことに安堵し、期待も膨らんでいた。感染者数が減り、いよいよ行けることを伝えると、大喜びで出発日が近付くにつれて「これに一緒に乗ろう」「ホテルのごはんってどういうのかな？楽しみ！」とユニット内は旅行の話でいっぱいだった。

十月九日(日)貸し切りバスで、第一班が熊本へ向けて出発。三井グリーンランドで遊び、ホテルに宿泊。ベッドがいくつも並んだ部屋と食事を見て、子どもたちの気分は高まった。二日目は阿蘇でトロッコ列車に乗り、カドリー・ドミニオンへ。動物と触れ合い、心癒される時間を過ごした。その後は、ユニット毎で違うプランで旅行を楽しんだ。大分班は杉乃井ホテルで豪華なバイキングを食べ宿泊。ハーモニーランドでは、パレードを間近で見るキャラクターたちに大興奮だった。宮崎はフェニックス・シーガイアに宿泊。高層階の部屋から見える景色に大はしゃぎだった。モアイ像や鬼の洗濯岩など宮崎の自然に触れ、充実した二日間を過ごした。旅行から帰った子どもたちは、お小遣いで家族や友達にお土産を買っており、帰りを待っていた職員へ思い出話をたくさん聞かせてくれた。目をキラキラさせて話をしてくる子どもたちの顔から旅行の楽しさが伝わってきた。

滝尾保育園
青空マルシェ
～地域との繋がり～

これまで滝尾保育園では老人ホームや地域の老人が集うサロン、中学校や高校等地域の方との交流をしてきた。しかし、新型コロナウイルスの感染症拡大を受け交流の場は規模縮小・中止となった。このままではいけないと、運営委員会を中心に何か出来る事があるのではと思いついたのが「青空マルシェ」だ。

今年度の行事予定を決める際、まだぼんやりとではあるが「青空マルシェ」を計画してみてはどうかという案が上がった。いざ始めて見ると普段の業務とは全く違う事、日々の保育と並行して行う事で大変な事ばかりだった。毎日、頭を悩ませ、本当に私たちに出来るのかという不安の中、職員を動かしたのは、法人設立七十周年の記念行事・オープン保育園同時開催をすることで地域の方と笑顔で楽しく繋がりたいという思いだった。「青空マルシェ」開催をたくさんの方に知ってもらうために、チラシを作り近所の方に配布し、お店や病院に掲示してもらった。これで本当に地域の方が来てくれるのか、後は自分たちのしてきたことを信じるだけだった。

そして迎えた十一月二十六日(土)当日。天気にも恵まれ、オープンと同時に予想以上の人出となった。キッチンカーやフリーマーケットはもちろんのこと、保護者会やパパクラブもお店を出して盛り上げてくれた。宇宙ブースにワークショップも人気を集める中、福祉会の事を知ってもらおうと各施設を紹介するブースを設置すると、たくさんの方が興味を示してくれた。色々な方の感想を聞く中でも「散歩をしていたら、とても楽しそうだったので」と参加してくださった地域の方の声が本当に嬉しかった。

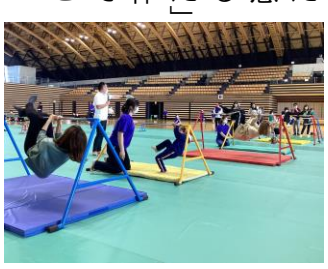
今後も地域の方との繋がりを大切に、滝尾保育園が長く地域に愛される場所となっていければと思っている。

明野しいのみ保育園
五十周年記念
親子レクリエーション

明野しいのみ保育園は今年四月に創立五十周年を迎える。その節目を祝う行事の一つとして、去る十月二十九日(土)に昭和電工ドーム武道センターで親子レクリエーションを開催した。保育園で日頃取り組んでいる体育遊びの講師を招き、親子で様々な体育遊びを楽しんだ。日頃親しんでいる鉄棒や平均台等を広い場所で出来るということで、子どもたちは始まる前から目を輝かせていた。

五歳児は二歳児クラスの時から体育遊びに取り組んでいたこともあり、デモンストレーションで講師との掛け合いを楽しみながら見事な身のこなしを見せてくれた。沢山の拍手をもらった時の自信に満ち溢れた表情が印象的だった。０歳児、一歳児のマット遊びでは、発達に応じてハイハイや横転などを親子で楽しんだ。二歳児になると体の動かし方もしっかりとしてきて、走る、ジャンプする等の動きも加わった。三歳児は平均台を使用して陣取りゲーム。バランスを取って安全に平均台を渡れるようになったことで一人ひとりが十分に楽しんでいた。保護者同士の対決もあり、子どもたちから大きな声援が上がっていた。四歳児は鉄棒の逆上がりに挑戦。講師から逆上がりの練習のコツを教えてもらった。最後は五歳児の競技。会場の広さを活かして平均台六本を円形に並べての環状線リレーを行った。四～五人が一チームとなり「頑張るぞ」「絶対一位になろう」と競い合う楽しさを味わいつつも、チームの友達と力を合わせて取り組んでいた。そのような姿に年長児としての成長を感じた。

保護者からは「運動が苦手と思っていた我が子が意外にできるのに驚いた」「親子で体を動かして楽しくすごせました」などの感想が聞かれた。子どもたちの「元気な身体作り」のために取り組み始めた体育遊びを、実践を通して親子で楽しむ良い機会となった。



編集後記

大分県福祉会会報　第八十七号が完成しました。

厳しい寒さにも負けず、元気いっぱいに頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

【編集委員】
編集責任者
安藤　覚（森の木施設長）
委　員
藤岡大樹（森の木）
小林奈未（森の木）
米野智恵（別府厚生館）
宮成俊佑（クローバー）
秋月　忍（滝尾保育園）
小松敏美（明野しいのみ保育園）
顧　問
安東一夫（事務局長）